久々に溜飲下げた展示会

方の会に寄せて

真喜志 勉

トロピカルなサマータイムが去り、グルメの秋だがあのマツタケの風格と価格はビンボー人にとって気の毒な程目の毒である。マツタケ考察が本稿の目的ではないのでホッかむりで素通りするともう芸術の秋なのである。

沖縄もヒラケて来たと見えて毎日あっちこっちで展示会が開かれる今日このごろの暮らしであるが、目がお嬉びする会というのはマレであると言うのが嘘イツワリのない所である。

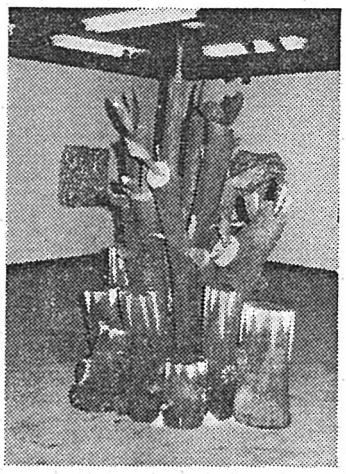
永津禎三、佐野順、高木栄田舎チックな質問をしたが、一、能勢裕子のカルテットはM・J・Qのようなハーモニーをかもしている。

「大きな空間に大作がポン・ポンとあるのは気持ちがいいナ」とM氏が言った。

小さな画廊で小ちんまりと点数だけ多い個展をすませたばかりのボクは、耳がかゆく馬耳東風したが、点数が多ければ良い…というのは大学の入試だけの話なのである。

永津氏から佐野・高木の両氏を紹介され「佐野繁次郎」とはどういう関係ですか?とドリフの高木ブーとシンセキか?と問わない所がボクの人格者としての理性の働きによるものだろう。

永津の四、五年の展開を見て来たがヨーロッパ古典に材を取ったような初期の作より和ものめく今回の作品（びょうぶのようなしつらえ）が面白く感じられる。



方の会展から

レセプションの時、そのびょうぶの前に車座になりお酒をのんだが、三分後にはアリンス国のオイラン言葉が飛び交いS夫人などホホほんのりとシナなど作り、浅黄裏のボクなどびょうぶの裏をイメージしてしまい「ハョーこっちゃ来い…」などというしまつである。

ソで固めた異形を提示した、佐野は段ボール紙をジェッ

壁面から程よい厚みのある作品はスリリングな緊張感があると同時に、重みをあいまいにするようなはじらうような表情をしている。

高木はダブローの表面を木枠で区切り「レスイズモア」をスローガンとするミニマルアートギャラリーで、細い木枠が色面に対し干渉体としてのダイナミズムを獲得していない所に不満は残るものの可能性を十分に見せている。

ゲストとして参加した能勢の行動大賞を受けた大作が圧観である。琉球松でサボテンを作った感じと言うと変だが、確たるカクタスの相を見せながら彫刻として成立しているのは、この人のしなやかな感性のなせる業である。凡庸な人がこのような手法を取るとサボテンの盆栽に落ちるのがニュートンのリンゴを見るより明らかである。

久々にスカッとした展示会を見て溜飲（りゅういん）のさがる思いをしているのである。

（真喜志勉・ぺんとはうす主宰）

（同展は11日（日）まで県民アートギャラリーで）